

稲盛和夫とニューソート思想

著者	吉田 健一
雑誌名	鹿児島大学稲盛アカデミー研究紀要
巻	11
ページ	25-47
発行年	2022-03
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031915

稲盛和夫とニューソート思想

吉田 健一（鹿児島大学 稲盛アカデミー・准教授）

Inamori Kazuo And New Thought

YOSHIDA Kenichi

キーワード：顕在意識、潜在意識、『生命の實相』、中村天風、ニューソート思想

はじめに

1. 『経営 12 カ条』の中で言及されている「心」の種類
2. 中村天風と潜在意識論
 - 2-1：中村天風の生涯
 - 2-2：中村天風の教え一心身統一法一の概要
 - 2-3：中村天風による潜在意識の説明
3. 谷口雅春と『生命の實相』
 - 3-1：谷口雅春の生涯と生長の家の教義
 - 3-2：稲盛和夫と『生命の實相』

おわりに

はじめに

稲盛和夫が潜在意識の重要性を極めて強く説く経営者であることはよく知られている。このテーマについて筆者は既に別の論稿でも論じたが、稲盛は具体的には二人の人物から大きな影響を受けている。その二人とは谷口雅春（以下、谷口と略す）と中村天風（以下、天風と略す）の二人である。この二人以外には潜在意識論で影響を受けた人物は他には見当たらないと良いほど、稲盛にとってこの二人から受けた影響は大きい。稲盛の潜在意識論は全てこの二人から発しているといっても良いであろう。

どちらの影響の方がより大きなものがあるかは一概にはいえないが、稲盛自身の書籍や講演に出て来る頻度が高いのは圧倒的に天風の方である。その理由は谷口が新興宗教の開祖であるのに対して天風の場合はそうではないからかもしれない。だが稲盛が先に出会っているのは谷口の方である。生長の家の創始者である宗教家の谷口は日本におけるニューソート思想の先駆けとされている。ニューソート思想とは19世紀のアメリカに端を発する思想であり、元々はキリスト教の新しい流れとして起こった。

ニューソート思想とは端的にいえば、内面の心が実人生の現象面になって現れるとするものであっ

て現在の自己啓発の源流となったものでもある。自己啓発の分野では次々と新しい書籍が刊行され、書店やコンビニエンスストアなど我々の周囲にも多くの情報があふれている。生長の家自体は宗教団体であるが、ニューソート思想の影響は宗教のみならず、一般的にはほぼ宗教色を感じさせない様々な自己啓発思想の流れにも今日でも強い影響を与えて続けている。

一方の天風は宗教家ではないがニューソート思想の先駆けと紹介されることもある。天風は元々、ヨガの行者であったが、後に心身統一法というオリジナルの思想と方法論を普及した人物である。この心身統一法は現在、『天風哲学』と呼ばれる宇宙観、生命観、人生観をバックグラウンドにして組み立てられたもので、“いのちの力”を十分に発揮するためのもの(中村天風財団のウェブサイト)と説明されている。

本稿では稲盛が谷口と天風からどのような影響を受けて自身の「フィロソフィ」の構築をしていったのかを検討する。本稿の構成は以下の通りである。まず第1章では天風と谷口に言及する前に経営において何よりも心を重視する稲盛が人間の心をどのような種類に分類しているかを『経営12カ条』から見る。『経営12カ条』は稲盛の経営に対する原則の示されたものであるが、その条文のほとんどは人間の持つ心についての言及されている。第1章では稲盛が人間の持つ心のどの部分を経営で重視しているかを確認する。

第2章においては天風と潜在意識論について論じる。最初に天風の生涯を概観し、次に天風の思想(教え)の概要を紹介する。そして、天風による潜在意識の説明を概観した後に稲盛への影響を検討する。第3章においては谷口と『生命の真相』について論じる。まず、谷口の生涯と生長の家の教義を簡単に確認した上で、稲盛が『生命の真相』から受けた影響について本人の著作から検討する。

1. 『経営12カ条』の中で言及されている「心」の種類

本章では『経営12カ条』(以下『12カ条』と略す)の中に見られる「心」の種類について考察する。『12カ条』には純粋にテクニカルな経営手法が説かれた部分もあるが、そのほとんどは心の持ちようについての条文から構成されている。

純粋にテクニカルなことが説かれている条文は第5条の「売上を最大限に伸ばし、経費を最小限に抑える一入るを量って、出ざるを制する。利益は追うものではない。利益は後からついてくる」と第6条の「値決めは経営一値決めはトップの仕事。お客様も喜び、自分が儲かるポイントは一点である」の2条だけである。

12カ条のうちのさらに2つを除く8つの条文は何らかの意味で人間の「心」に焦点を当てたものだが、その中でも条文ごとに特定の「心」または心の持ちように関連することについて説かれているものには、第3条の「強烈な願望を心に抱く」での潜在意識の重要性と「願望」、第4条の「誰にも負けない努力をする」での「努力」、第7条の「経営は強い意志で決まる」での「意志」、第8条の「燃える闘魂」での「闘魂」、「闘争心」などがある。

さらに第9条の「勇気をもって事にあたる」での「勇気」、第10条の「常に創造的な仕事をする」での「創造性」、第11条の「思いやりの心で誠実に」での「誠実」や「思いやりの心」、そして第12条の

「常に明るく前向きに、夢と希望を抱いて素直な心で」での「前向き」、「希望」、「素直」などが説かれている。

第1条は「事業の目的、意義を明確にする」で第2条は「具体的な目標を立てる」なので、これはテクニカルな経営論というほどでもないが精神的な徳目でもない。どちらにも分類できないので、『12カ条』の中では独自の分類に入れる。このように整理すると『12カ条』は2つが経営を行うにあたっての大前提（第1条と第2条）2つがテクニカルな項目（第5条と第6条）そしてこの4つを抜いた8つが心に関する項目だと分けることができるだろう。

しかし、京セラ経営研究部から社内向けに刊行されている『12カ条』には『「経営12カ条」の根底にあるもの』という項目が第1条の前に置かれている。この中では大前提として、『12カ条』の根底にある思想が説かれている。ここでは『12カ条』を貫く大前提が示されているが、まず、この世の中や人間に働く因果応報の法則についてのことが述べられて、その後、「宇宙の真理『因果応報の法則』」、「善き思いを強く持ち続ける」ことについて述べられている。

このように見ると『12カ条』においては、経営を行う上での大前提部分の2条とテクニカルな部分の2条を抜いた8条分と最初の「根底にあるもの」を入れて大体、9つ程度の「心」に対する項目があることになる。稲盛が『12カ条』で言及する人間の「心」及びの心によってもたらされる作用とでもいうべきものや経営に必要とされる人間のもつ精神の力を分解したものを再度、整理すると次の通りである。

まず全ての大前提として、「宇宙の真理」としての「因果応報の法則」があるとし、その法則にかなった人生を送るためには、善き思いを強く持ち続けることが必要とした上で「強烈な願望」、「潜在意識」（第3条）、「努力」（第4条）、「意志」（第7条）、「闘魂」、「闘争心」（第8条）、「勇気」（第9条）、「創造性」（第10条）、「思いやり」、「誠実」（第11条）、「前向き」、「夢」、「希望」、「素直」（第12条）が必要とされていることになる。

これらを並列に論じることができるのかどうかは難しいが、いずれも人間の持つ心のある部分に焦点を当てている。少し分類が難しいのは第3条と第12条である。第3条は「願望」といっても良いのだが、ここは稲盛のフィロソフィを貫く最も大きなテーマである「潜在意識」と一体になっている。「潜在意識に透徹する願望」で一つの概念となっている。さらにそれは大前提の「善き思いを強く持ち続ける」とも一体になっているので、ここまでで「善き強い願望を潜在意識に透徹するまでもつ」ことの重要性を説いている。もう一つ、一つの条文の中に複数の概念が出てくるのが第12条である。

第12条には「前向き」、「夢」、「希望」、「素直」など複数の言葉が出てきて、いずれも人間のもつ心の様相を表す言葉だが、これらもひとつくりになっているとみて良いだろう。このように考えると、再度、整理し直すと稲盛が経営12カ条で説いている経営に必要な「心」は、「善き思い」、「潜在意識に透徹する願望」、「意志」、「闘魂」、「勇気」、「創造性」、「思いやり」、「誠実」、「前向き」、「夢」、「希望」、「素直」となる。

この中でやや似ているものとしては「意志」と「闘魂」があるが、稲盛はこれも分けて論じており、「意志」は強さとしての「意志」の必要性を説くが、「闘魂」の部分は「闘争心」の必要性という面が強調されている。別の論稿で検討した「心の多重構造」には知性と感情は入っていたが意志は入っていない

かった。近代心理学による人間の精神活動の3分類の中における1つの「意思」については、この『12カ条』には入っている。ではそれぞれを稲盛がどう説いているのかを見て行こう。

まずは、「根底にある思想」である。この中で稲盛はまず「この経営12カ条を改めて読むと、『人間の思いは必ず実現していく』という思想が背景にあり、この経営12カ条が生まれてきた事がわかります。こういう思想がでてきたのは、中村天風というヨガの哲人に私が強く影響を受け、その思想が反映しているからだと思います」(経営12カ条、6頁)と自分の『12カ条』は中村天風から大きな影響を受けているということを説明する。

その後、「因果応報の法則」が説かれた上で、この『12カ条』にはその考え方だけではなく「ところが、この経営12カ条は、中村天風さんの思想が加味されているので、因果応報の法則よりも深遠な話になります。それでは物事を実現させる強い思いというのは、心のどこから生まれてくるのでしょうか」(同、9頁)と自分に与えた天風の影響の強さについて再度、言及する。

さらにここには、別の論稿で論じた真我について「心の中心には『真我』といわれるものが存在すると言われています。真我とは清らかで美しく、純粹なもので、悟りを開いた人にしか感知できないとされています。真我はこの宇宙を創ったものであり、宇宙そのものと同じで、すばらしい力をもっています。我々は真我を感知することはできませんが、真我から我々の意識に気高く美しいメッセージがシグナルとして送られてきます。それが『意志』です。意志が強い、意志が弱いと言いますが、意志は頭で考えて出てくるものではなく、そういう気持ちがどこから湧いてくるというものです」(同、9-10頁)との言及がある。

そして、「ただ思うだけでも、その思いが我々の人生をつくっていることは真理なのですが、もし、潜在意識にまで入っていくような思い方をすれば、その思いはもっと実現していくのです。さらに真我に近いところにまで思いを持っていけば、さらにその思いはもっと実現していくのです」(同、10頁)と潜在意識が真我との関係で説かれている。

ここがおそらく一番、一般には理解の難しい部分ではないだろうか。別稿で論じたように稲盛の提唱した「心の多重構造」では真我は人間の心の中心に位置するものとして説かれていたが意志というものは多重構造の中にはなかった。知性と感情と並列する人間の精神活動の一つが心の多重構造の中ではどこにも位置づけられていなかったのだが、稲盛は意志を真我から意識にシグナルとして送られて来たものの結果、生まれるものだとしている。

だが、これには少し疑問のある人もいるだろう。稲盛は「真我から我々の意識に気高く美しいメッセージがシグナルとして送られてくるものを「それが『意志』」だと説くのだが、意志には強い意志と弱い意志だけではなく、意志そのもののもつ内容として善き意志と悪い意志があるはずなのだが、意志は全て真我からのメッセージだとすると、悪い意志というものは存在しないことになる。あるいは、それが存在するとするならば、その悪い意志はどこから発してくるのかということが問題となる。ここはあまり詰めて考えられていないように思わざるを得ない部分である。

この章では「『思いは必ず実現する』というのは真理ですが、その思いは潜在意識に透徹するほどの強く持続した思いであれば、必ず実現すると中村天風さんは言っています」(同、11頁)といつもの稲盛

の持論が天風を援用して述べられている。

さらに第3条では「強烈な願望」、「潜在意識」の重要性が「私は終始一貫して、経営には、経営者が持つ『思い』が非常に大事だということを言っています。ですから、この『強烈な願望を心に抱く』ということが、経営にとっては非常に大事な項目になります。また、これに付随するのは、後に出てくる第7条の『経営は強い意志で決まる』です」(同、44頁)と説かれている。これまでの章で詳細に検討した稲盛の潜在意識論である。『12カ条』では第3条でストレートに展開されている。

また、ここでは「ですから、『心に強烈な願望を抱く』というのは、諸刃の剣みたいなもので、いい思いを強烈に抱けば、いい結果が生まれますし、悪い思いを強烈に抱けば、悪い結果が生まれます」(同、45頁)と潜在意識に入れる内容こそが問われるという稲盛の根本的な考え方の一つが説かれている。『京セラフィロソフィ』を始めとする他の本でも強く説かれている内容が「強烈に思い続けていくというのは、潜在意識に透徹するほどの強く持続した願望です。特に、『強く持続する』ということが大事です」(同、46頁)とここでも説かれている。

一方、潜在意識に願望を透徹させることは重要であるが、現実の日々においては、第4条で「努力」することの重要性が説かれている。ここでは『私は誰にも負けない努力をしています』と言い切れる人は、滅多にいないと思うのですが、私はみなさんにそれを要求しているのです。やはりすばらしい経営を続けていくには、誰にも負けない努力をしなければならないと、私は思っています」(同、57頁)と盛和塾の塾生に稲盛氏が会うたびに尋ねてきた言葉が紹介されている。

また、努力の重要性としては事業を伸ばすために必要なことはいうまでもないことだが、「私は『地味な仕事を一步一步堅実に、たゆまぬ努力を続ける』ことが、人を育てることになると感じています」(同、69頁)と努力が人間を育てるものであるとの持論を展開する。そして、稲盛は独自の天才についての見解を「名人といわれる素晴らしい人というのは、生涯を通じて地味な努力をした人でなければならないのです。また、天才といわれるような人は、ひとつのことにずっと打ち込んでいったから天才になっていくのです」(同、69頁)と説く。

ここには少し異論のある人もいるであろう。天才は修練によってなるものではないからこそ、天才なのであって特に芸術(その中でも特に音楽)や数学、将棋などの分野では天才と呼ばれる人は確実に存在するし、それらの人々は地味な仕事を弛みなく何十年も続けた結果と説き、天才となったわけではない。実際には事実は逆であって天才的な人でかつ弛みない努力を長年にわたって続けた人が、常人の及ばない領域に達しているということが多いのではないだろうか。文学者の中にもコツコツ努力をして綿密に計画的に作品を書く人もいる一方、何者かからインスピレーションを天才的に受ける人もいる(いわゆる天啓である)。分野によっても人によっても才能の発揮のされ方やそのタイプは様々である。

人間の才能(能力)には修練によって伸びていくものと元から与えられている適性によるものと、その両方が相まって発揮されるものなどがある。その境目は明確には分からないものも実際には多い。実際の人間社会では先天的な適性と後天的な修練が相まって一人一人のそれぞれ個別の才能を發揮して生きている。稲盛はここで「名人」と呼ばれる人々に言及した後、「天才といわれるような人は、ひとつのことにずっと打ち込んでいったから天才になっていくのです」といっているのはいささか唐突感があ

るといわざるを得ないだろう。

「意志」については第7条で説かれている。ここでは「私が『強い意志』と表現しているものは、心の内から盛り上がってくるような静かな闘志のことです」(同、112頁)と「強い意志」を「静かな闘志」を意味すると説く。そして、意志の強さがことの成否を決するのだという自身の信念については「人間の知恵、人間の意思というものは、ほんとうにすさまじいもので、やる気さえあれば何でもできるのです。それは、まさに人間の持つ不可思議な力の現れであり、『もうダメだ』とあきらめた時がダメなのであって、『必ず血路が開けるはずだ』という強い意志を持った人だけが、成功の道を歩いていけるのです」(同、117頁)や「どんな困難でも、強い意志を持って、あきらめないでその問題をよく見極め、粘り強く努力すれば、困難に見えた局面でも必ず打開できると私は考えています」(同、123頁)と述べる。

ここではさらに「強い意志というのは、ただ勇ましいものではなく、内から沸々とわきあがってくるものです。最後まで、目標を見失うことなく、可能であると信じて、『何とんでもやり通してみせる』という強い意志があれば、どんな困難な目標でも必ず達成することができるのです」(同、124頁)と意志があれば達成できない目標はないと述べる。

第8条が「闘魂」、「闘争心」である。ここは一見、第7条と内容が近いようにも思えるのだが、ここで稲盛は「経営者であれば、男性であれ、女性であれ、凄まじいまでの闘志や闘魂がなければならないと、私は思っています」(同、125頁)と経営者には闘志や闘魂が不可欠であるということ述べている。

さらに自身が発展させてきた京セラについては「…何とんでも相手に負けまいと立ち向かう、凄まじい闘魂があったから、京セラは先行する大会社に勝負を挑み、追い抜くことができたのです。私に燃えるような闘魂がなかったならば、とっくに敗れ去り、今日の京セラはなかったと思います」(同、132頁)と述べ自分の闘魂が京セラを発展させる原動力であったと述べる。

特にこの部分は稲盛らしい部分であり「…経営者には、勝ち気、負けん気というものがが必要です。私は売られた喧嘩は、買わねばならないと思っています。これは勝ち負けの問題ではなく、相手に勇気を試されているわけですから、買わねばならないのです。それが『燃える闘魂』です」(同、138頁)とも述べられている。この闘志、闘魂の重要性を説く部分は、『12カ条』の中で特に稲盛の性格から来ている部分だといっても良いだろう。

第9条で説かれるのが「勇気」の重要性であるが、稲盛は「経営者やリーダーにとって、自分のおかした過ちを潔く認めて改めることは、勇気の中でも一番大切なことです」(同、139頁)と最初に最も重要な勇気は自分の非を素直に認めることであると説く。稲盛はこの「勇気」に関しては勇気のもつ複数の面を説いている。最初が自分の過ちを認める勇気であるが、「つまりは、正しいことをしようと思えば、当然その反作用としての代償を払わなければなりませんし、敢えて代償を払うという勇気がいるのです。しかし、そういう勇気がないため妥協してしまうことがよくあるのです」(同、143頁)と信念を貫くためには代償を払うことも勇気であるとしている。

また稲盛は真の勇気といわゆる「蛮勇」とを峻別して「真の勇気とは、細心で、恐がりの資質を持っている人が、その恐がりの心を克服することだと私は思っています。ですから、恐がりだから、経営はできないということはありません。(中略)その恐怖心を克服できる勇気を持っているかどうかにより、

経営ができる、できないが決まってくるのだと思います」(同、146 頁)と怖がりの人でも勇気を持つことはできると説く。

第 10 条では「創造性」の重要性が説かれている。この条では京セラがなぜ発展することができたのかということについて「常に創造的な仕事をするのを習性にするので、今日、京セラは多岐にわたる事業を展開していますが、そういう技術がもともと会社にあったわけではないのです。何とでもこういう事業をしたいという思いが最初にあって、その思いが高じていき、いろんなチャンスに恵まれてできたことなのです」(同、159 頁)と創造的な仕事をするということを習慣にしてきたからこそ発展することができたということを説明している。

この条では稲盛は自身が若い時に感じたことについて「つねに創意工夫をし、いろんなことを考え、新しいものに遭遇していく。そういう道に行くことを私は宿命づけられていると感じました」(同、158 頁)と述べている。このことは、自分は楽な道を行けないのだと悟った時の話の延長線上で述べられていることである。

そして、この創造的な仕事をするのは特段、難しいことではなく「私は『創造的な仕事をするのに難しい技術は要りません。今、あなたがしている仕事を、今日よりは明日、明日よりは明後日と創意工夫をして、改良改善を加えたらどうですか』と言っています。(中略)一日の改良改善は、わずかかもしれませんが、昨日の改良改善に加えて、毎日創意工夫を続けていけば、365 日経てば、大きな進歩が生まれるのです」(同、160 頁)と毎日、小さな工夫をするのを習慣にする事の重要性を人々に説いていると述べている。

第 11 条では「思いやり」、「誠実」がテーマとなっているのだが、ここは心の多重構造について言及されている章である。ここで稲盛は「思いやりの心というのは、相手のことを愛する、助けてあげるという意味です。思いやりは、仏教では『慈悲』という言葉で表しています。(中略)また、キリスト教で言えば『愛』の心です。それを私たちは、思いやりの心と言っています」(同、172 頁)と述べ仏教でいう「慈悲」、キリスト教でいう「愛」が自身の言葉でいう「思いやりの心」の意味するところであると述べる。

その後、誠実とは何かということについては「…慈しみの心を持つと同時に、『誠実』に言っているのは、誠を尽くすというということです。自分の行動が誠実であるということは、真面目に誠を尽くして生きるということです」(同、172 頁)と述べている。

またこの条文の解説では「仏教には『利他』という言葉がありますが、これは森羅万象あらゆるものに慈しみの心で接し、助けてあげるという意味です。この利他の心がなければ、ビジネスの世界でも決してうまくいかない私は思っています」(同、179 頁)と他の書籍でも必ず説かれている「利他」についての持論を述べる。

最後の第 12 条では「前向き」、「夢」、「希望」、「素直」という複数の徳目について言及されている。この部分では特にリーダーのあり方について言及されており「リーダーはどんなことがあってもくじけない強い意志力が求められるからこそ、普段は明るく振る舞うように心がけることが大事なのです」(同、192 頁)とリーダーの資質として明るく振る舞えることが必要だと説いている。

また夢と希望を持つことの必要性を「常に明るく前向きな心、つまり、夢と希望を抱いている心には、必ずその心に合うような未来が現れてきます。つねに明るく振る舞っている人には、明るい人生や未来や、また、夢と希望をつねに抱いている人には、そういう夢と希望を満たしてくれるような未来が必ず現れてきます」(同、193頁)と夢と希望を持っている人は未来には夢や希望が実現すると説いている。

最後に「素直」な心を持つことについては「…素直な心というのは、人間が向上していくために必要なただひとつの要素です。素直でなければ人間は向上しません。素直だから人の教えを理解することができ、向上し、進歩していけるのです。素直な心というのは、ただ従順だという意味ではありません。海面のように柔軟で、いろんなものを吸収していけるのが、素直な心です」(同、196頁)と説いている。

以上、ここまで『12ヵ条』の中で稲盛が人間の心はかなり細かく分類して、それぞれの重要性を説いていることを確認した。大体のところは大方の人にとっては何度か読めば稲盛のいわんとしていることの趣旨は理解できると思われる。稲盛の人間観が特に色濃く出ているのは経営者に闘志、闘魂の重要性を説く部分と天才というものを長く努力した人と定義している部分であろう。闘志、闘魂の部分は稲盛の負けん気の強さを表しており、天才の定義の部分は人の人生における後天的な努力を重視している稲盛の人間観から来ている部分と解することができる。

途中で少し言及したように真我と意志の関係だけは少し理解が難しい。稲盛によれば意志は真我からのメッセージということになっているが、ここは多くの人から疑問が出る部分だろう。直接、言及されてはいないが、稲盛は意志の中でも善き意志は真我からのメッセージなのだが、悪しき意志(利己的な意思)は低次元の自我からもたらされるメッセージが表層意識に届くものだと考えているのかもしれない。もし、仮にそうだとするならば、その低次元の自我から表層意識に届いたメッセージの結果、湧き出てくる悪しき意志は、善き心によって克服されるか修正されるべきものであると稲盛は考えているのであろう。

2. 中村天風と潜在意識論

本章では稲盛がその生涯で最も大きな影響を受けた人物であるといっても過言ではない中村天風(以下、天風と略す)の生涯とその思想(または人間観の全体)の概要を見ておきたい。まず天風の生涯を『成功の実現』(日本経営合理化協会出版局、1988年)についている略年譜(『成功の実現』389頁-394頁)に沿って紹介する。なお、ここで以下に紹介する情報の出所は全て『成功の実現』のよるものだが、年譜の事実を文章化するため少し筆者が言葉を補った¹。

2-1: 中村天風の生涯

中村天風は1876(明治9)年、東京府豊島郡王子村(現:東京都北区王子)で生まれた。本名は中村三郎といった。父の祐興は九州柳川藩主の一門の出であった。1889(明治22)年頃、東京本郷の小学校を卒業して、九州福岡の修猷館に入学した。だが、1892(明治25)年には修猷館を退学して、親族の男

¹ 本稿の中村天風の生涯の記述にあたっては『成功の実現』(日本経営合理化協会出版局・1988年)の389頁から394頁の年譜を参考にした。

爵前田正名の紹介で頭山満の玄洋社に預けられる。当時、天風は気性の激しさから「玄洋社の虎」と呼ばれたという。

1894（明治27）年頃には、学習院に入学するが、すぐに中退した。その後、1902（明治35）年、26歳の時には、参謀本部諜報部員として採用され、特殊訓練を受けた後、満州に潜入した。当時は日露戦争開戦の前であったが、天風は情報収集と後方攪乱仕事を担当した。

1904（明治37）年、天風が28歳の時に日露戦争が勃発した。この時、天風は軍事探偵として活躍する。だが、この間、コザック騎兵に捕らえられ、死刑宣告を受ける。この時、天風は銃殺される寸前に同志の投じた手榴弾に吹き飛ばされて、奇しくも九死に一生を得た。1905（明治38）年、29歳の時には帰還した。軍事探偵のうち帰還できたものは113名のうち9名に過ぎなかったという。このころ、根津嘉一郎氏に乞われて、同氏が会長を務める大日本製粉の重役となった。

1906（明治39）年、30歳の時、奔馬性肺結核を発病して死に直面する。当時、結核に関する最高権威といわれた北里柴三郎の治療を受けたが好転しなかった。1909（明治42）年、33歳の時、救いを求めてアメリカにわたる。アメリカ随一の青年哲学者といわれたスウェッド・マーデンに会うが得るものはなかったという。その後、フランスにわたりオペラ女優サラ・ベルナル女史の紹介でリヨン大学のリンドラー博士に会い、「鏡による暗示法」を教わった。だが、病状は悪化し再びサラ女史の紹介でドイツに赴き、哲学者ハンス・ドリュー博士に会うが、求める答えは得られなかったという。

1911（明治44）年、35歳の時、帰郷を決心したが、その途上、カイロのホテルで偶然、ヨガの大聖人カリアッパ師にめぐりあう。同師に連れられヒマラヤ山脈で2年数か月、修行し悟入転生の新天地を拓いたとされる。そして、天風は日本人として初のヨガの直伝者となった。1913（大正2）年、37歳の時、帰国途上、上海に立ち寄り、竹馬の友であった当時の中国大使山座円次郎に会う。山座の要請で辛亥革命に参加。孫文を助け最高政務顧問として尽力したが二か月で革命に挫折し帰国する。帰国後数年にして、東京実業貯蔵銀行の他、いくつかの会社を経営する。

1919（大正8）年、43歳の時、突如、社会的地位、財産を放棄して単身独力で「統一哲医学会」を創設し、毎日、上野公園や芝公園で辻説法を行うようになる。この年の9月、検事長向江巖に見いだされ、総理大臣の原敬に会う。原は「この人は大道で講演させておく人ではない」といったとされている。このころ、東郷平八郎など政界・財界の有力者が次々と「統一哲医学会」に入会する。

1924（大正13）年、48歳の時、山本英輔海軍大将（当時の海軍大学校長）の紹介により小松侯爵が統一哲医学会に入会し、小松の推挙によって東久邇、北白川、竹田の三内親王に複数回にわたって進講する。このころの天風を受講者には政治家の尾崎行雄、後藤新平（内相、満鉄総裁）などがいた。1925（大正14）年6月、49歳の時、大阪放送局より「病と病気」をラジオ放送した。その後、京都、名古屋、神戸、小樽に次々に支部を開設。1940（昭和15）年1月、「統一哲医学会」を「天風会」と改称し終戦に至るまで活動を展開する。

1946（昭和21）年10月、戦後初めて講習会を開催。1947（昭和22）年10月、71歳の時、GHQ幹部約250名を対象に有楽町の毎日ホールで3日間講演した。これ以降、再び全国的に活動を展開する。1968（昭和43）年12月、92歳で死去した。直接、天風から薫陶を受けたものは全国に10万人を数え

ると言われている。一切、宣伝を行わず会員はすべて紹介によるものだったが、1988(昭和63)年、会員数は累計100万人を超えつつあったという。

天風の教えを受けた著名人には代表的な人物だけでも原敬(元首相)、山本五十六(元帥)、尾崎行雄(元法相)、双葉山定次(元横綱・日本相撲協会元理事長)、大佛次郎(作家)、園田直(元厚生相・元外相)、宇野千代(作家)、廣岡達郎(野球評論家)などがある(『成功の実現』、395頁-396頁)。

以上が天風の生涯の概要であるが、天風にとっての人生の大きな転機は2回あったと考えられる。一度目は1911(明治44)年、35歳の時に帰郷を決心した時、カイロのホテルで偶然、ヨガの大聖人カリアップ師にめぐり会った時である。結核を患っていた天風は北里柴三郎の治療を受けても治らず、アメリカやフランスで哲学者などの著名人に会って話を聞いても何も病気は良くならなかった。だが、カリアップ師と出会ったことによって天風の人生は変わる。天風はヒマラヤ山脈で2年数か月、修行し悟入転生の新天地を拓いたとされる。天風はカリアップ師の教えによって日本人として初のヨガの直伝者となった。なお、カリアップ師がどのような人物であったかについては今でも詳しいことは分かってはいないということである。

二度目は1919(大正8)年、43歳の時、突如、社会的地位、財産を放棄して単身独力で「統一哲医学会」を創設し、毎日、上野公園や芝公園で辻説法を開始した時であろう。この年の9月、総理大臣の原敬に会う。天風の教えが世の中に広まり始めるのはこの時以降であるが、独力で辻説法を開始した天風が当時の検事長であった向江巖に見いだされたとはいえ、首相の原敬に面会をしたというのは大変な出来事であったであろう。その後、天風の教えは飛躍的に各界各層に広がり多くの政治家、実業家、作家、スポーツ選手などにも大きな影響を与えることとなった。

2-2: 中村天風の教え一心身統一法一の概要

以下に天風の思想を紹介する。天風の思想はよく「天風哲学」などと称されているようであるが、実際には天風の教えは世界を体系的に説明する「哲学」や社会の改革を訴える「思想」というようなものではなく、人間の身体と精神を統一するための方法論である。

以下に天風会のウェブサイト書かれている説明を見ていきたい²。まず『『一心身統一法』とは『天風哲学』と呼ばれる宇宙観、生命観、人生観をバックグラウンドにして組み立てられたもので、“いのちの力”を充分に発揮するための中村天風オリジナルの理論と実践論です』との説明がある。

そして、「心の態度を積極的にし、体の状態を健全に保つことで、健康で幸福な人生を堂々と歩むことができるのです。昔から学者、識者、宗教家による幸福論は多数ありますが、そのすべてが『How to say』という理想論に終始し、具体的な実践論である『How to do』が示されたことはほとんどありませんでした」とあり、天風の幸福論は理論だけではなく実践方法であることが示されている。

ここに「天風哲学」といわれるものの最大の特徴があるといつて良いだろう。一般に天風は哲学者や

² 中村天風財団は、正式には公益財団法人天風会といい、東京都文京区大塚に事務所がある。現在では天風の書籍の販売や各種のセミナーを開催している。昭和37(1962)年に厚生省(当時)許可の財団法人となり、平成31(2019)年に創立100周年を迎えた。

思想家という紹介がなされることもあり、または成功哲学を広めた人物という風に理解されているが、天風の本質はヨガの実践者である。まず人間の心身の不調をどうすれば直すことができるのかということが、天風哲学では最も重視されている。

天風会のウェブサイトには「心身統一法」についての主な説明もあるので次に見ていく。まず「積極心の基礎づくり 観念要素の更改法夜寝る前の連想暗示法、鏡に向かいなりたい自分の精神状態を命令する命令暗示法、その効果をよりの確にする断定暗示法やそれに付随する方法により、消極的な心を一掃させます」とあり、「積極心で生きる 積極観念の養成法毎日の生活の中でもすれば不平不満、愚痴、不安や心配など、心を消極的に使う癖がついているのを訂正して、積極方向に習慣づけることにより心を強化する方法です」との説明がある。

さらに「積極心を保つ：神経反射の調節法(クンバハカ)外部から与えられる精神的・肉体的ショックから受ける自律神経の動揺を防止し、精神の安定を確保することができる体勢のとり方とその訓練法です。マイナスの感情に振り回されることがなくなり、生命に大きなダメージを与えるようなストレスから身を守ります」との説明がなされている。

また「呼吸操練生命を維持する上で最も大事なものは「空気」とされ、「この空気の中から、新鮮な活力を各器官に受け入れているというイメージと共に行う呼吸法で新陳代謝を促し自律神経を強化」とされている。続く説明によれば「統一式運動法」は「18種類の運動によって組み立てられ、各動作はいずれも精神を強くし信念を確立するような哲学的意味が配されてい」とのことである。

さらに養動法については「座った体勢、立った体勢、横たわった体勢で体を動かし、心と体を調和させます。神経の興奮を静め気持ちを安定させるとともに、内臓の働きを高め、消化を促進させ、運動不足を補います」とある。

そして「安定打坐法(天風式坐禅法)」については「人生の不安や悩み、煩わしい日常生活でのストレスなどで疲れきった心を、余計なことを考えず何事にも捉われない純粋無垢な生まれたての心に戻し、命の中にある無限の力を自覚するための行法です。ブザーの音に耳を傾けて心を集中し、ブザーの音が途切れた瞬間に『無』の心を体験することが出来ます。宮本武蔵や現代の一流スポーツ選手、天才芸術家などと称される人々が事に臨んで最大の力を発揮することができる、いわゆる『無念無想』の境地です。『無』の瞬間を繰り返し体験することにより、私たちも日常生活においてもまた人生に事あるときも変わる事のない絶対的な強さをもつ心を発揮することができます」との説明がある。

「精神能力開発訓練」については『無念無想』の状態から人間の潜在的な能力を現実化させる訓練です。感性が磨かれ、日常生活や仕事においてはインスピレーションやアイデアが湧くようになります。また人の気持ちを敏感に感じ取れるようになり、夫婦や親子、職場での人間関係がスムーズになります」との説明がなされている。

さらに「真理瞑想行安定打坐」は「雑念妄念を取り去った状態で、中村天風が悟った宇宙真理(宇宙観、生命観、人生観)を自悟・自覚することを目的とする行修で、原則として『修練会』でのみ行われるもの」との説明がなされている。

以上が天風会のウェブサイトに説明されている「天風哲学」と呼ばれる心身統一法の基本であるが、

一見して分かるように、これは全て実践を伴うことであり、単純に言葉でのみ説明できるものではない。だが、それでも文字を読んだ範囲でも、心身統一法が人間の心身を統一して、心の中の邪念を払い集中し、実人生を思いのままに生きることを目指すものであることまでは理解できよう。

2-3：中村天風による潜在意識の説明

次に稲盛が何よりも自らの「フィロソフィ」の中で強調する潜在意識の重要性であるが、天風自身の言葉を少し確認しておきたい。ここでは『研心抄』³から引用する。

天風は「吾々の意識は、肉性意識、心性意識、靈性意識の、何れもいわゆる実在意識と潜在意識の二つに分割されて存在して居るといふ事柄である。そして吾人の心理作用の九〇パーセントまでは、この潜在意識の作用で行われて居るといふことも記憶すべき大切な事なのである。ところが兎角多くの人は精神活動の直接の衝に当たって居るといふ関係から、実在意識を潜在意識よりも重視して考える傾向がある。然しながら前述したように実在意識の精神活動も単独において行われる場合は実際に於いて極めて稀なので、殆んど潜在意識の作用から内的誘導を受けて行われて居るのである」(中村、『研心抄』、147-148頁)と述べている。天風は人間の意識レベルを三段階に分けているが、そのいずれのレベルも二つに分割されていると説いている。

ここで出てくる実在意識という言葉は聞きなれない言葉だが、これは潜在意識に対する実在的な意識という意味であるから顕在意識のことを指していると理解して良いであろう。「肉性意識、心性意識、靈性意識の、何れもいわゆる実在意識と潜在意識の二つに分割」という部分は一見、難しいが肉性意識、心性意識、靈性意識は人間の意識の深さのレベルのことで実在意識と潜在意識は意識できる意識(顕在意識)と意識できない意識(潜在意識)のことである。

しかし、これは3つの意識が、各々、2つずつあるので意識の種類は合計6種類あるということではない。各々に実在意識と潜在意識があるといっても、肉性意識、心性意識、靈性意識は意識の深さのレベルの話である。これは層を構築している。靈性意識ほど人間の深くにある本質的な意識で肉性意識は本能に近いものである。

これら3層の意識もさらに自分で意識される意識(実在意識=顕在意識)と自分では意識されない意識(潜在意識)の二つに分割されているということである。つまりは低次元の意識にも顕在意識と潜在意識があり、靈的なレベルの意識にも顕在意識と潜在意識があるということである。つまりは潜在意識に程度の低いものを多く入れておくと顕在意識(実在意識)部分も肉性意識として出てくることになるし、潜在意識に低次元な自我ではなく高次元な意識を入れておくと顕在意識(実在意識)にも自然に靈性意識からの意識が顕在化されて出てくるということであろう。

ここは文字で記すことが非常に困難な部分であるが、潜在意識だから正しいもので、顕在意識だから

³『研心抄』は天風の代表的な著作。中村天風財団のウェブサイトには「人間は心と身体の両面からもって生まれた潜在能力を100%発揮してこそ、充実した幸福な人生が送れる。古来、人間の不幸の根源は心が迷うことにある。一体、人間の『心』とは何なのか。人間の心の正体を深く分析し、いかに心を統御し強くするか、そしてその強い心でいかに人生を乗り切るかが述べられている。中村天風の創り上げた『心身統一法』における精神面について詳述した書」との説明がある。

良くないものであるということなのではなく、まず人間は潜在意識が顕在意識に影響を及ぼしていることと、さらには人間の意識レベルには、誰しも霊的な部分から肉欲的な部分までがあり、霊的な部分はより人間の奥にあり表層的な部分に本能に近い肉欲的なものがあるということの二つの面を天風は説いている。

また天風は「吾々が何か難しい問題に直面し、一生懸命その解決の方法を考えるのに専念しても、どうも適当の名案が心に浮かばないような時、いわゆる考え疲れて一時その事柄を心から抛（な）げ出すか、でなければその時突発した他の用事などに、心を応接せしめて、その事柄から心を離したいという場合、言いかえると全然その事柄と心との関係が中断されて居る時、不図（ふと）考えるともなくよい名案や正しい判断などが心に泛（うか）んで来るということは誰でもが実際に経験のあることと信ずる」（中村、同、148頁）と誰もが日常で経験する出来事を例に挙げて潜在意識について説明している。

この部分はいわゆる「ひらめき」とかまたは「天啓」ともいわれる部分である。少し考えれば、我々も日常的に経験していることに気が付くことではないだろうか。ずっとあることを考えていると、そのことを考えている時には妙案は出てこないが、別のことをしている時に一瞬にして妙案が浮かぶということは誰もが経験したことがあるであろう。

そして、天風は「それ故に吾人が真に幸福を感じ得る理想的の人生に生きるのには、恒に潜在意識領を正当に整理して霊性意識発現の材料を多分にし、同時に霊性意識を出来得る限りより多く発現して人生に生きるよう、その実際習練に努力すべきである。そうすれば普通の人が空しく考慮考察に精力や時間を費やす時、刹那咄嗟の間にも、名案工夫が心に浮かぶという至便至上な尊い人間となり得るに至るは必然である。そしてそうなり得れば、人生は極めて悠々たるものとなり、どんな難局に直面しても虚心平気で対応出来得るようになる」（中村、同、149頁-150頁）と説く。

この「恒に潜在意識領を正当に整理して霊性意識発現の材料を多分にし、同時に霊性意識を出来得る限りより多く発現して人生に生きるよう」という部分こそが最も大切な部分であろう。先に見たように天風によれば人間の意識は肉性意識、心性意識、霊性意識の3つの階層に分かれているが、これがそれぞれ、また内部で2つに分かれているということではなく、潜在意識が顕在意識（実在意識）に影響を及ぼすからこそ、潜在意識の中身をきれいなものにしておく必要があるということである。潜在意識の内容がどのようなものであるかによって顕在意識（実在意識）の内容が変わっているということである。

そして、天風は自身が提唱した心身統一法の目的を「又吾人の志す実践の彼岸点もこの点にある。然もこの目的を完全に達成するには、偏に潜在意識の整理を確実にし、霊性意識の発現分量を増大することに専念せねばならない。ここに私の力説する観念要素の更改の実際必要もあるのである」（中村、同、150頁）と説いている。

「潜在意識の整理を確実にし、霊性意識の発現分量を増大することに専念」というのは、潜在意識の中身をどうするかが最も重要なことであり、潜在意識によって霊性意識が発現するか肉性意識となるのかが変わってくるということである。つまり顕在意識（表に出る意識）に肉性意識、心性意識、霊性意識の3層があるが、顕在意識として霊性意識が発現するか肉性意識が発現するのかは、潜在意識の中に何が入っているかによって変わるので潜在意識を純化しなければならないということである。

少し注意が必要だと思われるのは、霊性意識が心の奥にあるからこの霊性意識がすなわち潜在意識であり、肉性意識が表面に出ているのでこれが顕在意識（実在意識）に対応しているということなのではないということである。潜在意識の中身によって霊性意識を発現させることができるか肉性意識が多く出てくるかどうかが決まってくるということである。

稲盛が天風から大きな影響を受けているのはすでに何度も確認した通りであるが、稲盛は潜在意識の重要性を説いているものの、稲盛自身は自著の中で天風のいう心の構造や解釈を詳細に説いているわけではない。天風から受けた影響の強さについては様々な書籍で言及されているが、稲盛自身が自著の中で天風のいう霊性意識や肉性意識についての解釈や解説を試みているわけでもない。

別稿で言及したように稲盛は心の多重構造で心を5つ（『生き方』での分類）ないしは7つ（『経営12カ条』での分類）の多重構造だとしている。しかし、稲盛の多重構造の図は心を階層（外側は特に機能別）ごとに分けたものであり、意識を顕在意識と潜在意識というように深さのレベルで分けられたものでない。この辺り天風も心の多重構造を説いているが、天風の場合は意識を3層に分けて説いており（肉性意識、心性意識、霊性意識）、この中には意思とか知性とか感情という近代心理学で定義される精神の3つの要素については入れてはない。このように考えると稲盛の心観は天風から潜在意識論については多大な影響を受けつつも、また別個に独自に考えられた部分もあることが理解できる。

2-4：稲盛による中村天風の引用

稲盛による天風の引用部分をいくつか見てみよう。例えば稲盛は「その天風さんは、『常に明るく、ポジティブな思いを描きなさい』と言っておられます。その理由は、人生はその人が心に描いたとおりになるからです。つまり、この現世における個々人がたどっていく道は、その人の心に描いた道をそのままたどっていくということなのです。このことは、天風さんだけではなく、多くの思想家が同じことを言っています」（『経営12カ条』、6-7頁）と述べている。これは先の章でみた『経営12カ条』の最初の部分である。

『京セラフィロソフィ』にも説かれている「有意注意」について、稲盛は天風から影響を受けているが、例えば、『生き方』（サンマーク出版、2004年）の中には「（有意注意の重要性が説かれた後）中村天風さんは、この意をもって意を注ぐことの重要性を強調され、『有意注意の人生でなければ意味がない』とまでいわれています。私たちの集中力には限界がありますから、つねに意識を一つのものに集めることはむずかしいのですが、そうであるよう心がけていると、だんだんとこの有意注意が習慣化されて、物事の本質や核心がつかめ、的確な判断を下せる力が備わってきます」（『生き方』、75頁）という記述がある。

また、持続した願望を強く持つことの重要性はほとんど全てととっても過言ではないほど稲盛の多くの本の中で説かれているが「中村天風さんが、この『持続した願望は実現する』ということをおのづかに端的に表現されています。私も京セラのスローガンにしたり、また、盛和塾の例会で紹介したこともありました。『新しき計画の成就是ただ不撓不屈の一心にあり。さらばひたむきにただ想え、気高く、強く一筋に』皆さんも会社の経営計画などを立てる際は、『会社をこういうふう立派にしたい』と考える

と思いますが、『その成就是ただ不撓不屈の一心にあり』、つまり、どんな困難が立ちは大かっけいようとも、自分は一心不乱に努力するのだという心構えが必要なのです」（『京セラフィロソフィ』、249頁-250頁）と天風の言葉を直接、引用してこのことの重要性を説いている部分もある。

さらに心のあり様が人生を決定するというのも稲盛がほとんど全ての本で説いていることであるが、このことについては、『人生は自分がどう受け止めるかでまったく違ってきます。たったそれだけのことなのに、人はそれを知らない。知らないために、みんなが迷ってしまいます。だからみんなつまらない人生を送っているのです。たったそれだけのことを信じて生きていけば素晴らしい人生が開けるのです』天風さんは一生かけてそのことを説いて歩かれました。天風さんのことを知ったのはわたしが三十代のころでした。なるほど素晴らしい生き方、考え方であると感心し、わたしも天風さんの本を一生懸命読み、人生について多くのことを学ぶことができました。そして、天風さんが教えているように、人生とはその人の心の持ち方で、つまり人生に対する考え方で大きく変わると確信するようになりました」（『君の思いは必ず実現する』、167頁）と子ども用に書かれた本の中でも直接、天風について言及している。

これらの本はほんの一部であって稲盛の本には他にも天風の名前が出てくる。このように見ても理解できるように稲盛は非常に天風から大きな影響を受けている。いつ頃、天風との出会いがあったいつ頃から大きな影響を受け始めたのかまでは著書には明記してはない。また誰からの紹介だったかというようなことが書かれているものもない。だが、ここに引用した本の一つには「天風さんのことを知ったのはわたしが三十代のころでした（『君の思いは必ず実現する』、167頁）と書いてある。このことによつて稲盛が天風と出会ったのは30代だったことが分かる。稲盛が京都セラミックを起業したのは27歳の時であるから、その時点ではまだ天風とは出会ってはおらず、会社を始めて数年後に天風と出会ったようである。

また、稲盛は天風から多大な影響を受けているが、稲盛が自著で天風に言及する時にはいくつかのパターンがある。ここに引用したものが全てではないのだが、稲盛が自著において天風を引用する時は、主として1. ポジティブな思いを持つことの重要性が説かれる時、2. 有意注意を意識することの重要性が説かれる時、3. 人生は心に描いた通りになるという自身の信念が説かれる時、4. 事の成否は持続した強い願望があるか否かで決まるといことが説かれる時などに引用されることが多い。

稲盛が自身の「フィロソフィ」を構築していくにあたって影響を受けた人物は複数いるのだが、その中でも最も大きな影響を受けた人物が天風であることはまず間違いのないところである。これは筆者が別稿でも述べたことだが、稲盛の「フィロソフィ」自体は何人かの思想家や実業家、宗教家の影響によって構築されている。また稲盛の思想のベースには幼い頃からの仏教がある。だが、その『フィロソフィ』の最も中核部分を占めているといっても過言ではない「潜在意識の重要性」についての部分はほぼ全てが天風と次章で見る谷口から受けた影響であり、特に天風の影響は極めて強いということまでは確実にいえるであろう。

3.谷口雅春と『生命の實相』

3-1：谷口雅春の生涯と生長の家の教義

本章では稲盛が天風と並んで最も強い影響を受けた谷口と『生命の實相』について概観しておきたい。膨大な生長の家についての教義を本稿の本章で全て紹介するのは不可能なので、本章では基本的な部分だけを確認しておきたい。そして、稲盛の潜在意識論に『生命の實相』が与えた影響について考察する。

谷口は新宗教「生長の家」の創始者で、1893（明治26）年に兵庫県（現在の兵庫県神戸市）で生まれた。早稲田大学文学部英文科を中退。著書は400冊にも及ぶ。主著は『生命の實相』。『生命の實相』には全40巻（携帯版）と全20巻（愛蔵版）のものがある。

谷口は早稲田大学を中退して大本の専従活動家となった。そして出口王仁三郎⁴の『靈界物語』の口述筆記を任せられ重要な任務にあっていたが、1922（大正11）年の第一次大本事件を機に大本から脱退した。その後、浅野和二郎の設立した『心靈科学研究会』に参加したが、当時流行していたニューソートに強い影響を受けた。そして谷口はニューソートに「光明思想」の訳語をあてた。1929（昭和4）年12月13日の深夜、神の啓示を受けたとして、文筆活動でニューソート流の成功哲学を世界に広めるとの志を立てて『生長の家』誌の執筆に着手した。1930（昭和5）年3月1日に神道、仏教、キリスト教と現代科学を加味したとして『生長の家』誌1000部を自費出版した。生長の家ではこの日をもって立教記念日としている。

生長の家は第2次世界大戦期には急速に右傾化した。そして、谷口も国家主義、天皇信仰を説いていく。さらには皇軍必勝のスローガンの下、大東亜戦争への協力もした。戦後は大東亜戦争（太平洋戦争）に敗れたのは島国根性に凝り固まった「偽の日本」であって本当の「神州日本国」が敗れたわけではないとの主張を展開した。この主張は後の生長の家の活動にも持ち越されて行くこととなった。

さらにその後、谷口は「日本国憲法はGHQが日本を弱体化するために日本に押し付けたものであるので無効である」と主張し、「即時廃棄して大日本国憲法を復活させなければならない」と説いた。1972（昭和47）年には当時の福田赳夫首相に日本国憲法の無効宣言するように提言した。1974（昭和49）年には宗教界の保守主義団体「日本を守る会」を結成した。この団体は1981（昭和56）年には「日本を守る国民会議」と改組されることとなった元の「元号法制化実現国民会議」とともに現在の日本会議⁵の前身の一つとなった。

また谷口は優生保護法の廃止や肉食の廃止も訴えたが政府に受け入れられなかったことから1983（昭和58）年には政治活動を停止し、以後は自民党政権と距離をおくこととなった。そして、1985（昭和60）年には生長の家総本山のある長崎で亡くなった。現在の生長の家は谷口の存命中のような右派的、国家主義的な路線をとってはいないのだが⁶、谷口の路線を引き継いだ人々が後に日本会議の中核メン

⁴ 出口王仁三郎は1871年8月27日（明治4年旧7月12日）～1948（昭和23）年1月19日。「大本」の二大教祖の一人。大本においては聖師と呼ばれている。戦前、国家神道と相容れない教義を展開した大本は危険勢力として政府の弾圧を受けた。多くの新宗教に影響を与えた。

⁵ 日本会議は1997（平成9）年に設立された日本の政治団体。1997年に「日本を守る会」と「日本を守る国民会議」を統合して設立された。国内最大の右派団体とされる。「美しい日本の再建と誇りある国づくり」を目指しており、男系による皇位の安定的継承を目的とした皇室典範改正、現行憲法にかわる、新憲法の制定を目指している。

⁶ 現在の生長の家は右派路線を否定し、安倍政権の進めた安保法制等の政策にも反対する声明を出している。日本会議

バーとして活動してことも一部では知られていることである⁷。

次に生長の家の教義を簡単に紹介しておきたい。生長の家のウェブサイトには「生長の家」については、

「生長の家は、谷口雅春・創始者（1893～1985）が長年にわたる求道・精進の末に、『人間は神の子である』という悟りを得て、その喜びを伝えるために、昭和5年に『生長の家』誌（月刊）を発刊したのが始まりです。これを読んだ 読者の多くが『人間神の子』の本性に目覚め、人生の様々な問題を克服し、幸福な人生へと導かれました。それらの人々が自発的に生長の家の教えを知人や友人に伝え、多くの人々に伝わっていきました。こうして谷口雅春師によって始められた、人類の生活の全面を光明化しようとする『人類光明化運動』は、谷口雅宣・生長の家総裁（1951～）へと継承され、今日では、善一元なる神への信仰によって世界の平和をめざす「国際平和信仰運動」として、日本をはじめ北米、中南米、アジア・オセアニア、欧州の世界各地の拠点を通して運動の輪を広げています。今日では、人類が科学技術を利用して過剰なまでの経済活動を行ったために、地球の自然が許容できる限界を超え、地球の自然も人類も幸せに生きていくことが難しい局面にあります。そのため、生長の家では、『神・自然・人間は、本来一体である』との教えに基づいて、“新しい文明”の基礎づくりを進めています」との説明がなされている。

また「生長の家の教えの主な特長は「唯神実相（ゆいしんじっそう）」「唯心所現（ゆいしんしょげん）」「万教帰一（ばんきょうきいつ）」の3つの言葉で表わすことができます」と主な特徴についての説明がなされている。

同じく生長の家のウェブサイトによれば、唯神実相（ゆいしんじっそう）については「『唯神実相』の『実相』とは本当にある世界のことであり、唯一にして絶対の神がつくられた世界のことであり、実相の世界は神の御徳が充満していて、人間は神の子であり、神と自然と人間とは大調和している世界です。つまり本当に存在するものは唯、神と神の作られた完全円満な世界だけであるという意味で「唯神実相」と呼んでいます。一方、人間の感覚器官で捉える世界を「現象」と呼んでいます。現象の世界は、全体の膨大な情報量のうち、人間の肉体の目、耳、鼻、口、皮膚で濾（こ）し取ったごく一部の不完全な情報を、脳が組み立て直して仮に作り上げている世界です。ですから、世の中には戦争やテロがあったり、病気などの不完全な出来事があるように見えますが、それらはすべて『現象』であって、本当にある世界の『実相』ではないと説いています」と説明がある。

また、唯心所現については「『唯心所現』とは、この現象世界は人間の心によって作り出している世界であるという教えを表現しています。唯心所現の『心』とは『コトバ』であり、コトバには行動で表現する『身（しん）』、発声音で表現する『口（く）』、心の中で思う『意（い）』の3つがあり、これら身・口・意の三業を駆使することで、唯心所現の法則によって現象世界をいかようにでも作り上げることが出来るのです。唯心所現の法則は厳密かつ公平であり、悪いコトバを使えば、悪い世界が現象世界に現

の中核メンバーは高齢になっているかつての生長の家の信者・活動家であるとされる。

⁷ 生長の家と日本会議の関係については、青木理『日本会議の正体』（平凡社新書、2016年）、俵義文『日本会議の全貌—知られざる巨大組織の実態—』（花伝社、2016年）などに詳しい。

れてしまいます。従って善い世界を実現させようと思うなら、実相世界の善きコトバ、神様の御徳である、智慧・愛・生命をコトバで表現すればよいことになります」との説明がある。

さらに、万教帰一（ばんきょうきいつ）については『『万教帰一』とは、万（よろず）の教えを一つ（生長の家）にするという意味ではありません。これは後ろから読んで、一つの教えが万の教えとして展開していると説いています。宗教に違いがあるのは国や地域、民族によって服装が違いうように、宗教も文化的な違いが現れているからだと言えます。目玉焼きに喩えると、中心部分の黄身を普遍的な根本真理と見立て、それぞれの宗教が共有していると考えます。一方、周縁部分である白身は、文化、民族、時代などの違いによって変化している部分だと考えると分かりやすいでしょう。世界の各宗教が、この中心部分（黄身）の共通性と周縁（白身）の多様性をお互いに認め合うことによって、宗教間の対立は消えることになります。それを端的に表わした言葉が『万教帰一』の教えなのです」との説明がある。

3-2：稲盛和夫と『生命の實相』

稲盛と『生命の實相』の出会いはとても古い。稲盛は13歳の時、結核の前段階の肺浸潤にかかったのだが、その時に『生命の實相』に初めて出会っている。この年は1945（昭和20）年で、鹿児島の実家が焼けた年でもあり8月に日本が終戦を迎えた年でもある。

この時のことを稲盛は自伝である『ガキの自叙伝』（日本経済新聞社、2004年）の中で「熱に浮かされて病床に伏せっていると、隣の借家住まいの奥さんが生け垣越しに声をかけてきた。『和夫ちゃん、ちょっと難しいけどこの本読んでごらん』と渡されたのは『生長の家』の主催者、谷口雅春の『生命の實相』である。もちろん何の本かはさっぱりわからない。だが、同居の叔父も結核で明日をも知れないという時なので、藁にもすがる気持ちで、むさぼるように読んだ。ページをめくっているうち、こんなくだりに出会った。『われわれの心の内にそれを引き寄せる磁石があって、周囲から剣でもピストルでも災難でも病気でも失業でも引き寄せるのであります』。子どもながらに思い当たることがあった。結核の叔父がいる離れの前を通る時、私は感染するのが怖くていつも鼻をつまんで走り抜けた。父には『うつるからそこは通ってはいけない』といわれていた。（中略）叔父が助からなくなると、父は母に『もう弟の世話をしなくていい。あとは自分がやるからお前は離れにいくな』といった。（中略）その父も、平然と歩いていた兄も別条はなく、誰よりも注意していた私だけがかかってしまった。（中略）そこから逃げようとしていた私だけがそういう目にあったのは、結核を気にする心が災いを呼び込んでしまったのではないか。この事実をみただけで、ああ、谷口さんがいっておられるのはその通りだと思った』（『ガキの自叙伝』、32-33頁）と述べている。

また、代表的な著作である『生き方』（サンマーク出版、2004年）には「『オレも血を吐いて、もうじき死ぬのか』——まだ幼い私は打ちのめされ、微熱の続くだるい体を持って余し、はかない気持ちにさいなまれながらも、病の床に伏せる他に途方はありませんでした。そのときに、隣家のおばさんが不憫に思ったのでしょうか、これでも読んでみなさいと、『生長の家』の創始者である谷口雅春さんの『生命の實相』という本を貸してくれました。中学に入ろうとする子どもにとっては、ややむずかしすぎる内容でしたが、私は何かにすがりたい一心で、わからないなりに読みふけり、やがてそこに、『われわれの心の

うちに災難を引き寄せる磁石がある。病気になったのは病気を引き寄せる弱い心をもっているからだ』というくだりを見出して、その言葉にくぎづけになりました。谷口さんは『心の様相』という言葉を使って、人生で出合う事柄はみんな心が引き寄せたものである。病気もその例外ではない。すべては心の様相が現実そのまま投影するのだということを説いておられました。(中略) 否定的なことを考える心が、否定的な現実を引き寄せたのだと思知らされたのです。なるほど心の様相が現実そのものなのだ、少年の私は谷口さんの言葉を痛感し、自らの振る舞いを反省もして、それからはなるべくよいことを思おうと誓いもしました。しかし、そこは衆生凡人の悲しさで、心のありようはなかなか改まらず、それからまだ、紆余曲折の人生が続くことになりました」(『生き方』、54-56頁)との記述がある。

最近の著作である『心。』(サンマーク出版、2009年)でも「…そんな私を見かねたのか、当時隣に住んでいたおばさんが一冊の本を貸してくれました。そこにはおよそ、次のようなことが書いてありました。『いかなる災難もそれを引き寄せる心があるからこそ起こってくる。自分の心が呼ばないものは、何ひとつ近づいてくることはない』ああ、たしかにそうだ、と私は思いました。(中略) すべては“心”がつくりだしている——このとき得た教訓は、その後の私の人生に大きくかわる大切な気づきとなりましたが、当時とまだ年端もいかない子どものこと。その意味するところを十分理解するまでにはいたらず、それによって人生が大きく変わることもありませんでした」(『心。』、15頁-16頁)と述べられている。

他の本にも谷口の『生命の真相』との出会いが書かれているものはあるが、大体、同じような内容のことが記されている。どの本でも結核の前段階の肺浸潤にかかった時に隣家の主婦に『生命の真相』を借りたということが書かれており、『生命の真相』には「人間の心の中には磁石があり、その磁石が様々な不幸を呼び込んでいる」ということが書かれてあり、そのことについて、「思い当たることがあった」という記述がある。

この年、稲盛が『生命の真相』をどの程度、深くまで読み込んだのかまでは分からない。子どもが読むにすれば、『生命の真相』はかなり分厚い本であるし、この年齢の子どもが読むにすれば内容的にもかなり難しい本である。また宗教書であることから、ただ文字が読めれば内容を理解できるというものではない。『生命の真相』を理解するには、ある程度の宗教的なセンスが必要でもある。子どもの時の稲盛が正確にどの部分を読んだかまでは自著では語っていないのだが、大体、同じ部分が要約されて引用されている。この稲盛がよく要約して引用する部分を『生命の真相』から以下に抜き出してみた(なお、旧字体は筆者が新字体に改めた)。

まず人間の心の中には磁石があるということを谷口は「運命が傾くと云うのは、その人の『心』の中に不幸な事件を吸い寄せる磁石が出来ているわけであって、こんな磁石を『心』の中から取出して捨ててしまわない限りは、その人の運命が善くなる気遣いはないのであります。では、この不幸な事件を吸い寄せる『心の磁石』とは何であるかと申しますと、其の根本的なものは、神と一体ではない、神と離れた心であります。心の内に神という無限性に生かされているという自信がなく、自分の生命は物質の偶然的集合でつくられていて外から加わる偶然の力で直ぐ破壊してしまうであろうと云うような誤れる生命観が吾々の心の奥底の大部分を占領していると、それが磁石になって不幸を引寄せる、そのほか様々な人生苦を引寄せる。だから此の『磁石』を取除けるためには、何よりも先ず、自分は大生命の無

限りに生かされていると云う徹底した大信念を心の奥底に築き上げて、自分の生命は決して物質の偶然的集合でつくられたものではなく、常に大生命の無限力で護られていると云う心真理を心の底深くに信ずるようにならなければならないのであります」(谷口、『生命の真相』、131頁)と述べている。

そして、稲盛が要約して自著で引用する箇所は「剣でもピストルの弾丸でも外から吾々に打ち込んで来るものだと思ったらそれこそ大間違いで、吾々の心のうちにそれを引寄せせる磁石があって、周囲から剣でもピストルでも災難でも病気でも失業でも引寄せせるのであります。此処の道理がおわかりになりますと、どんな災難に会っても病気にかかっても外に対して恨んだり小言を云ったりする必要がなくなって、自分の好まない事件が起こって来たならば、自分の心の中に其の好まない事件と同じものがあると云うことを省みて、その宜しくない性質を心の中から取去るようにすれば好いのであります。そうすると自分の周囲、境遇、肉体の健康状態などが自分の改善された心を映して改善されて来るのであります」(谷口、『生命の真相』、133頁)の部分であろう。この部分が要約されて稲盛の著書には紹介されている。

稲盛と『生命の真相』との出会いは13歳の時だが、その後も稲盛が熱心な生長の家の信者だったことはよく知られている。最初に隣家の主婦から『生命の真相』を借りた時にどのくらい読んだのかまでは分からないが、その後も長く稲盛は『生命の真相』を読み続けてきたと思われる。また、稲盛は自著にはほとんど同じ部分の要約しか引用しないが、その部分しか読んでいないということは考えられず、『生命の真相』に説かれている生命観や健康法、『神想観』⁸を行ってきたことも間違いないことであろうと推測される。

谷口は新宗教の開祖であることからなのか、信教の自由に配慮してなのか稲盛の本には谷口が出てくる本とそうでない本がある。ここに挙げた『ガキの自叙伝』は自伝であり、『生き方』と『心。』は自身のこれまでの生涯で考えて来たことや転機になったことが書かれている本である。これらの本の中では稲盛は特に隠すことなく生長の家の谷口のことを言及しているが、『京セラフィロソフィ』には谷口は出ては来ない。ここは天風がほとんど全ての稲盛の本に出てくるといっても過言ではないのとは対照的である。

谷口の名前は天風に比べるとそこまでは全ての本に出てくるわけではない。とはいうものの稲盛は今日に至るまで熱心な生長の家の信者でもあるので、13歳の時に初めて『生命の真相』を読んでそれきり読まなかったというわけではないであろう。稲盛は最初に『生命の真相』を読んだ13歳の時以来、谷口の影響を強く受けてきたことは間違いないと思われる。解釈が難しいのは、稲盛の中で天風の影響の方が強いのか生長の家の『生命の真相』の影響の方が強いのかという部分である。結論からいえば、このことは稲盛によって書かれたものからは、どちらの影響がより強くどちらの影響が補完的なものか

⁸ 生長の家のウェブサイトによれば「これは生長の家の瞑想法です。一口に瞑想といっても、世の中には心身の静寂を取り戻すための比較的日常的なメディテーションから、神仏との一体感を実感する宗教行まで、広い範囲のものがああります。仏教、キリスト教、イスラム教などでは、それぞれ独自の瞑想を奨励しており、生長の家の神想観もその一つです。生長の家では、人間は誰もが「神の子」であり、無限の可能性を持った素晴らしい存在であると考えます。(中略) それらを前提として、神想観では、「神の子である自分」が神の創られた完全な善ばかりの世界(実相=本当のすがた)をイメージし、肉眼を超えた心の眼で観る練習をするのです」と説明されている。

ということまでは分からない。どちらが強くてどちらが補完的かというよりも、稲盛の中では双方ともが同じ程度に重みをもって、後年の稲盛の思想（フィロソフィ）を形作ったとも考えられる。

谷口と天風の共通点は双方ともに潜在意識の重要性を説いているという部分である。稲盛がいかに潜在意識の重要性を説いているかということは、既にこれまでに確認してきたが、この稲盛の強い潜在意識の重要性へのこだわりは谷口の『生命の實相』と天風の潜在意識論の両方から来るものであろう。またこの2人の影響が他の人物に比べて突出して高いことも稲盛の著書から考えるに間違いのないことであろう。

だが一方で谷口と天風には共通点とともにとても大きな相違点もある。その相違点の最も大きな部分は谷口が宗教家であり、『生命の實相』が信仰の対象であることに対して、天風の思想（教え）の方は宗教ではないということである。天風は元々、ヨガの実践者ではあるが、天風の教えは信仰の対象ではなく、実践を通じた心身の統一方法に主軸がある。なんとなく天風も宗教家のように捉えられている場合もあるのだが、中村天風財団が宗教法人ではなく公益財団法人であることから理解できるように、天風の場合には信仰という考え方はない。

出会った時期は圧倒的に『生命の實相』の方が古い。稲盛は13歳で『生命の實相』と出会っているが、天風との出会いは先に見たように30代である。この出会いの時期のかなりの違いから考えられると稲盛の潜在意識論は順番としては、先に谷口の『生命の實相』によってその骨格部分が形成されて、それが稲盛の中で徐々に信じる（信仰を持つ）という状況になっていったところ、30代で出会った天風の影響がそれまでに形成されていた潜在意識論に加わり、稲盛の独自の潜在意識論が形成されていったのではないかと考えられる。

その際、「信じる」（信仰）という部分は『生命の實相』からの影響が強く、実際に呼吸法やヨガなどで心身を整え潜在意識をどう活用するかという実践面については天風の方法論からの影響を強く受けた上で自ら潜在意識を活用することを実践したと考えるのが自然かもしれない。また、稲盛が明確に生長の家の信者であったことは事実であるが、オリジナルな稲盛の潜在意識論の形成にあたっては信仰部分から来るものと実践部分から来るものの双方が混在しているのであろう。

おわりに

以上、本稿においては稲盛が谷口と天風からどのような影響を受けて自身の「フィロソフィ」の構築をしていったのかを検討した。本稿においては天風と谷口に言及するに先立って稲盛が人間の心をどのような種類に分類しているかを『経営12カ条』から見たが、その結果、稲盛が経営のほぼ全ての局面で人間の持つ心のある部分が必要とされていると考えていることが確認できた。

第2章においては天風と潜在意識論について論じた。この結果、いかに稲盛が天風から大きな影響を一貫して受け続けて来たかが確認できた。稲盛は天風のことを「哲学者」または「哲人」と称しているが、厳密な意味において天風を「哲学者」といえるかは議論の余地があろう。天風は人間の持つ潜在能力の重大性を説いた人物であるが、厳密にいえば世界を体系的に考えたいわゆる「哲学者」ではない。稲盛が天風を哲学者、哲人と称するのは人間の精神の持つ力の偉大さを実証した人物だと考

えているからであろう。

実際のところ、稲盛の天風への傾倒ぶりは読者からすれば、少し異様な程だと感じられなくもない。ほぼ全ての書籍には潜在意識の重要性についての言及があり、その時には天風への言及があるからである。だがここまで稲盛が潜在意識の重要性について説き、その時に天風に言及するのは、稲盛がこれまで新規の事業に取り組む時に潜在意識を活用してきたからであろう。それは初期の京セラの時から始まり、第二電電の創設の時も日本航空の再建時に成功を目指すにあたって、自身が潜在意識を活用したからであろう。

第3章においては谷口と『生命の真相』について論じた。稲盛はあまり積極的に谷口については書籍や講演では言及してはいないことは確認した通りである。また『京セラフィロソフィ』の中にも天風は出てきても谷口は出てこないこともすでに述べた通りである。だが『生き方』や『心。』といった稲盛自身の人生観が述べられている書籍においては、少年期の谷口との出会いについても詳しく言及されている。

谷口については、『京セラフィロソフィ』には言及がないものの、人生観について書かれている書籍には必ず言及がある理由は、少年期の経験が極めて大きなものであったからであろう。少年期に肺浸潤になり、死を覚悟したこともある稲盛にとって『生命の真相』との出会いは非常に大きな出来事であった。内面のあり様が現実の人生で起きることに影響を与えるという稲盛の人生観は、この少年期に最初に意識された。その後の人生を通じて、この稲盛の信念は益々、強固なものとなって行くことになるのだが、最初に内面のあり様と実人生で起きる現象の関連を意識した経験はやはり生涯を通じて大きな出来事であったのであろう。

潜在意識を何よりも重視する稲盛が天風と谷口から受けた影響には計り知れないものがある。この二人の与えた影響はそれ以外の人物と比較して突出しているといって良い。最後にいわゆる「稲盛経営哲学」を学ぶ人々にとっては、稲盛が誰からの影響を受けて「フィロソフィ」の中心にある潜在意識の重要性に至ったのかということを理解することなく、稲盛の人生観や経営思想の最も中心的な部分を理解することはできないということを指摘しておきたい。

【参考文献】

- 稲盛和夫『ガキの自叙伝』日本経済新聞社・2004年
- 稲盛和夫『生き方』サンマーク出版・2004年
- 稲盛和夫『心。』サンマーク出版・2019年
- 稲盛和夫『京セラフィロソフィ』サンマーク出版・2014年
- 稲盛和夫『経営12カ条』京セラ経営研究部・2005年
- 稲盛和夫『君の思いは必ず実現する』財界研究所・2004年
- 谷口雅春『生命の真相』初版革表紙復刻版・1982年
- 中村天風『真人生の探求』財団法人天風会・1947年
- 中村天風『研心抄』財団法人天風会・1948年

中村天風『錬身抄』財団法人天風会・1949年

中村天風『成功の実現』日本経営合理化協会出版局・1988年

中村天風財団（天風会）ウェブサイト <https://www.tempukai.or.jp/>

宗教法人生長の家 公式ウェブサイト <https://www.jp.seicho-no-ie.org/>